

〈研究ノート〉

肥後国天草における人・物の移動

——旅人改帳・往来請負帳の分析——

はじめに

本稿は近世後期の肥後国天草における人の移動について、村への人の出入りをチェックする旅人改帳・往来請負帳の両方が存在する高浜村をフィールドとして分析するものである。さらに物の移動も分析し、天草における流通構造の一端をあきらかにしたい。

近世において人の移動を把握する代表的な資料は宗門改帳である。宗門改は近世日本に居住したほぼすべての人間を、近世を通じて、全国的に把握した、三つの特徴を持つ制度である^①。しかしその記載内容は人の移動を記した詳細なものから、家主以外の情報はほとんど記さない簡略なものまで、地域によって千差万別である。人の移動記事も宗門改帳自体に記される場合、宗門増減帳、願書留・往来請負帳等宗門改帳と別帳に記される場合がある。以上の資料は村人

の生死・婚姻・養子をはじめ、一時的な移動といえる奉公・巡礼などの状況を知ることができる。しかし人の移動とは村人の移動のみではなく、村外から入り込む旅人も含めてはじめて全体の移動動向を把握することができる。村から出る人、村へ入る人、この二つの移動は密接に関連しており、両方の状況を分析する必要がある。

一般的に旅人は各藩領の境である街道の関所、湊の番所などで往来手形をチェックされ管理される。関所や番所において作成される旅人改系統の資料のなかで最も研究が進められているのが浦番所・船問屋で作成された「客船帳」「入船帳」である。湊に入港する他国の船を帆別銭徴収を目的として、船の帆反数・所属・船頭・積荷などを記した資料である^②。このように藩境で旅人を把握する方法が全国的に実施されたが、本稿で取り上げる天草の旅人改帳のように村ごとに旅人を把握する方法は数少ないように思われる。

東 昇

近世後期以降盛んになる四国遍路では、土佐藩において巡礼者の藩内の滞在日数を制限し、毎晩宿泊する村の庄屋のチェックが実施された⁽³⁾。しかし、それは巡礼者側が「宿泊帳」を持参するものであり、庄屋側に蓄積していくものではなかった。制度として類似しているが、巡礼者以外のすべての旅人を把握していない点、庄屋側で記録を作成し役所に提出しない点で天草の旅人改帳と異なる。

天草の旅人改帳は村ごとにすべての旅人を把握しており、村人の移動を記す宗門改帳・往来請負帳と合わせると、村における「人の移動」の総体を把握できる資料である。天草の旅人改に関しては、渡辺尚志氏が大庄屋の職務の一つとして、文化期の触を中心に紹介している⁽⁴⁾。

また旅人改帳に記される売買情報を分析することによって、他資料ではうかがい知ることのできない、物の移動、流通・産業の具体的な状況を示したい。天草の経済流通に関する先行研究として、楠本美智子氏の天草の商人石本家の経営分析をあげることができる⁽⁵⁾。しかしそれは一商人の経営実態であり、一地域の流通全体を押さえたものではない。全国的には柚木孝氏、上村雅洋氏らが廻船資料を用い、各地の流通構造を分析しているが、その手法を学びつつ、天草の人の移動と物の流通について考えてみたい。

一 高浜村と産業

分析対象とする天草は九州地方の中西部、有明海・東シナ海に囲まれた島々からなる地域で、肥後国に属し、一町八六村で天草郡を構成していた。近世初期大名領であったが、寛永一四（一六三七）年の島原の乱以降、一時期を除いて一貫して幕府領であった。分析の中心となる高浜村は天草下島の西海岸、東シナ海に面した村である。所属する村組は八ヶ村からなる大江組である。石高は近世を通じて六三一石なのに対して、人口は一七世紀末から一九世紀後半にかけて九〇〇人から三六〇〇人と四倍に増大した。この傾向は他の天草の村でも同様であり、農業生産力に比して人口過多の村であった⁽⁷⁾。

高浜村の産業は、明和五（一七六八）年「人別稼仕訳帳」で概要を知ることができる。この段階で総人口は二八七〇人、その内農業従事者一〇五七人（三七％）、焼物や薪など山関係の仕事従事者五五八人（一九％）、船による輸送や漁など海関係の仕事従事者四六〇人（一六％）、そして非労働人口の老人・子供七九〇人（二八％）、その他医者・奉公人が数人である。労働人口の五〇％が農業、それぞれ二五％が山・海に関する仕事に従事しており、高浜村の産業構造もほぼこの割合に準じていたと思われる。

慶応三（一八六七）年大江組各村の農業以外の産業を把握した

「諸運上物并農間諸稼其外書上帳」によると、人数不明であるがまず漁方役を納める漁師が記されている。そして帆役を納める船持が二三人、これは大江組の六四%を占めている。その他、焼物一、酒造一、砥石山一、湯屋二、家大工一〇、船大工一〇、農具鍛冶七、杣人一一、薬種商人一、小間物商人五、呉服商人二、桶師五、左官三人の各種商工業者の存在が確認できる。農業従事者の数は不明であるが、高浜村はこの一世紀の間に船持層を中心とした船による流通が展開し、各種商工業者による小都市的空間を形成していたと思われる。次章以降この変化について順次分析していく。

二 旅人改帳・往来請負帳

今回分析の対象とする上田家文書は、高浜村庄屋を務めた上田家に伝わった約六四〇〇点の村方文書である。上田家は近世初頭に高浜に移り住み、代々庄屋を務めた。六代目伝五右衛門が宝暦一二(二七六二)年に陶山や窯業をはじめ、現在まで続いている。この上田家文書中に旅人改帳、往来請負帳が一九世紀前期から中期にかけて継続的に存在している。旅人改帳は村へ入る旅人を改めた資料で文化一〇(一八一三)～文久四(一八六四)年の一六冊が残され、その内、文化一〇年から天保三(一八三二)年までの二〇年間に旅人の到来が九〇〇件、年平均四五件となる。文化一〇年「旅人改帳」ではつぎのような形式で記されている¹²⁾。

当西三月十七日到着
筑後国下田
四月十二日出帆
船頭 伊作
右廻船老艘水主共式人乗組、積荷油鬻付売払塩鯛塩鯛買入候積、
当村問屋仲右衛門方江到着士候

最初に到着した月日と出航した月日、つぎに出身国と身分・名前、そして到来手段・同行人数・目的・仲介の問屋名が簡潔に記されている。

対して往来請負帳は村から出る村人を改めた資料で寛政九(一七九七)～慶応二(一八六六)年の二九冊が残され、その内寛政九年から文政一〇(一八二七)年までの記録に残る一八年間に往来人は一〇九七件、年平均六一件二四四人となる。文化一〇年正月「往来御手形請負目録」ではつぎのような形式で記されている¹³⁾。

三月十一日
庄蔵
一、用事ニ付五嶋江罷越日数六十日
清八

最初に村を出た月日・名前、そして目的・目的地・往来日数が簡潔に記されている。高浜村では、一九世紀前期から中期にかけて、

旅人改帳、往来請負帳から平均すると、毎月四件の旅人と五件の往来人という人の移動を確認することができる。

三 旅人改と旅人の実態

旅人改の整備

天草における旅人改の開始時期については明らかではない。しかし寛延三（一七五〇）年の「富岡町明細帳」には、つぎのような項目があることから、すでに一八世紀中頃には旅人改を実施していたことが判明する。

一、旅船当湊へ入津仕町方ニ而商売仕候得ハ、浦間屋方へ揚り問屋方ヨリ遠見御番人江往来手形致持参御改を請、町役人方江も申届商売事仕申候

一、他所者出入吟味書付毎月相改書付差上申候

一、他所之者当町へ致船揚商売事、又ハ用事有之村方江参候節ハ町役人添手形仕差通申候、在方江船揚げたし候得者、其村庄屋方ヨリ添手形出申候、添手形無之忍揚之者ハ揚之村方吟味仕、村送りニ差遣船揚げ之村ヨリ他国へ送り戻し申候

この項目の直前には僧侶・神官・町役人が他国へ行く際の往来手形について記しており、これら一連の項目はすべて人の出入りに関

する触をまとめたものである。天草はその後天明三（一七八三）年から文化一〇（一八一三）年まで島原藩の預地となる。享和元（一八〇二）年四月一六日に富岡会所詰大庄屋から各組へ「旅人月切御届不足」を催促した資料があることから旅人改を継続している¹⁵⁾。

文化一〇年、島原藩預地から長崎代官による幕府直轄支配へ変更された際に、旅人改が強化された。それは旅人改関係の触の数から読みとることができる。島原藩預地であった文化五（一八〇八）年から九年までの五年間の触は六件、文化五年五月九日の悪党徘徊の取締等¹⁶⁾、具体的な各事例への対処的な触が多い。幕府直轄となった文化一〇年から一四年までの五年間では三一件、文化一二年三月二日の旅人取締の触等¹⁷⁾、制度の実施細則や基本法令を繰り返し示している。文化一〇年前後では、触の数も約五倍に増加し、内容も事例対処的なものから実施細則的なものへ変化していることがうかがえる。

文化一〇年七月会所詰大庄屋からの触には、旅人取締方、旅人改帳の雛形を示している¹⁸⁾。旅人取締方では、船揚地・目的地・通過した村の三ヶ所で文書を作成し正確に旅人を監視する条項をはじめ、六ヶ条にわたり旅人の取締細則を定めている。旅人改帳の雛形は商売・稼・医師修行・用事・廻船の五つの旅人の目的別に作られており、当時の旅人の目的を端的にあらわしている。八月には長崎代官から直接「旅人取締申渡」という形で旅人改のシステムが通達さ

れる。^①そのシステムとは、①旅人が天草へ入る場合には、渡海船の船頭、船揚地で積荷を取り引きする問屋、同じく船揚地の宿主を仲介者として、その地の大庄屋・庄屋へ名前書を提出する。②大庄屋・庄屋は所持している往来切手をチェックし、用向を尋問する。③天草への旅人として許可できる場合には送手形を発行し、その許可した旅人を旅人改帳に記載して、役所へ届け出るという一連の流れである。

旅人改は幕末まで継続されるが、取締の程度は時期により変化する。安政六（一八五九）年五月二〇日会所詰大庄屋からの触には「組々届出候旅人月切帳之表、旅人滞在又ハ一宿等之もの出入有之村ハ連々可有之候得共、更ニ出入無之村方過半有之、全ク村役人取調子方等閑故」とある。^②安政六年当時、旅人の出入りが無いと届け出ている村が過半数あり、この理由を村役人の取り調べが不徹底なためと判断している。旅人改は制度としては継続されていたが、取締の程度は時代を経るに従い低下傾向にあった。

旅人を改める理由

この旅人改制度を実施し、幕末まで継続した理由はいかなるものであろうか。それは旅人改関係の触本文にあらわれており、三つの理由に分類することができる。

まず最初は天草の人口・経済状況による理由である。文化一四

（二八一七）年六月二十八日の富岡役所からの触にはつぎのように記されている。^③

当郡之儀者一体人数多ニ而、土地出産之穀類ニ而者夫食も引足兼運々及困窮候趣を以、先々於支配伺之上御手当定免も被仰付候処、近来ハ別而不糺ニ旅人多入込村毎ニ為致住居、別而未熟之医師共余国ニ而家業も難出来候故、手筋を以て修行当郡江入込、中ニ者本業を失ひ公事出入之訴状を相認、又者築山庭作之手伝等いたし以外之次第ニ而、天草郡相統方之仕法を崩候ニ付

（後略）

この触によると天草は人口が多いにもかかわらず、郡内の生産量ではその人口に対する食糧を自給できず困窮しているとある。そして取締が緩み旅人が多く村に入り込んでいる状況であり、この状況は百姓相統方仕法を妨げているとある。百姓相統方仕法とは寛政五（二七九三）、八、弘化三（一八四六）、明治元（一八六八）年の計四回、小前百姓を経済的に救済し「百姓相統」を実現させようとする天草独自の法令である。旅人の増大は天草島民の経済・生活を脅かすものとして判断され、その流入を禁止していたのである。

二番目に異国船との接触、抜け荷防止による理由である。文政七（一八二四）年一月一三日の会所詰大庄屋からの触には「郡中海辺

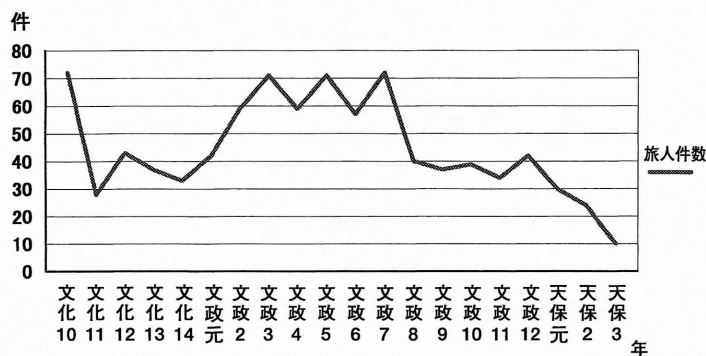


図1 旅人件数の変遷 (文化10—天保3年、900件)

取締悪敷有之、不正之唐物積込参候哉ニ相聞候ニ付、以後ハ他国商ひ船者勿論地廻りたりとも入津又者湊毎船繋迄も時々無遠慮相改不正之品もの有之候ハ、早速最寄村方江挽附御届ケ申立候様被仰聞候」とある。^②唐物の抜け荷に関する触で、旅人の中でも特に他国商船を取り締まるものである。

文化一〇(二八一三)

年九月一八日の富岡役所からの触には「異国船

近々長崎湊出帆いたし候条、浦々人別出入等入念相改、若疑敷もの有之者早々可訴出候」とある。^③中国船・オランダ船の出航に際して密航、抜け荷の可能性があるので、浦々の人の出入りを取り締まっている。異国船との接触、抜け荷防止など長崎近辺の島嶼部に共通の理由により旅人改が実施されていた。

三番目として村の治安維持に関する理由である。文政七年七月二

五日の富岡役所の触には「右之流人当月廿三日村方罷出に今立帰不申、多分島拔と相見候、万一村々ニ而見当候ハ、召捕其所ニ留置、早速御役所江可届出候、別而渡海之口々入念可申候」とある。^④亀浦村に置かれていた流人於登吉が島抜けをしたと思われるので、村々での捕縛要請と、他国への渡海口での取締を依頼したものである。

また文政七年閏八月二日の富岡役所からの触には「所々農具市相濟候処、旅人今以出国不致博奕其外遊芸一体之風儀ヲ乱候趣ニ相聞」、^⑤文久三(一八六三)年七月二三日の会所詰大庄屋からの触には「町山口村農具市ニ立入可申心組之旅人共中ニ者悪党之もの入込可申哉茂難計事」とある。^⑥年代は離れているが両方とも農具市開催に伴う旅人入り込みに関するもので、文政七年には旅人が市終了後も出国せず、博奕や遊芸を行い風儀を乱すとあり、文久三年には市に来る旅人の中に悪党が入る可能性を否定できないとある。旅人を村の風儀・治安を乱すものとしてとらえその入り込みを禁止している。

以上のように旅人を改める理由は、①天草は人口が多く困窮する経済状況の進行を阻止、②長崎に近く東シナ海に面していることから異国船との接触や抜け荷の防止、③流人等の犯罪者の捕縛と村の治安維持の三点をあげることができる。

四 旅人の実態

旅人の変遷

ここでは「旅人改帳」を分析して、旅人の実態である旅人数・出国地・到来した目的・上陸地・逗留日数・逗留場所・売買物品の項目について明らかにしたい。図1は高浜村の旅人の件数を年別にあらわしたものである。文化一〇（二八・一三）年から天保三（一八三二）年まで二〇年間の旅人件数は全体で九〇〇件となり、年平均は四五件となる。この図から①文化一〇～一一年に半減している、②文政期前半は平均六五件であるが、文政八年を境に後半には四〇件と減少し、天保期に向かうにつれて減少傾向が続くことを読みとることができる。

①については、先述したように島原藩預地から幕府領直轄地へと支配替が行われ、旅人取締が厳重になったことに影響を受けていると思われる。また②については、特に文政七から八年にかけての減少が著しい。これは文政七（一八二四）年九月に発生した「白銀之大黒信仰」を騙る三人の旅人を本泉村の村人が打ち殺した事件に影響を受けていると思われる²⁸。これを受けて富岡役所はつぎのような触を出し、旅人取締を強化した。

右之他ニ茂郡中無宿并悪党共寄々打寄品々企事いたし候趣相聞

候間、取方ゆるみ不申哉、此書付披見早々申合村毎廻村いたし取可致候、近来月々見廻もゆるみ候間、自今弥以嚴重ニ可相心得候以上

本泉村以外にも無宿や悪党が郡内へ入り込み事件が発生しており、旅人取締が機能していないと指摘している。そして文政八年八月二十九日の富岡役所の触では「当郡之儀多分旅人ヨリ事起吟味ニ成行候儀多く、然上ハ旅人為入候儀者第一不宜候条、村毎ニ穿鑿および自然入込居候ハ、出国可申付候」とまで記した²⁹。ここでは郡内の事件は旅人によって引き起こされる場合が多く、そのため旅人が郡内へ入ること自体が良くないことである、と断定し旅人が各種事件の元凶であると指摘している。

このように毎年一定の旅人数であったが、悪党的な旅人の入り込みにより、たびたび取り締まりが行われ、減少していく。また一八世紀前半には、先に示したように旅人＝悪党という意識が、富岡役所をはじめ村人まで浸透しており、旅人数にもその傾向がうかがえる。

旅人の出国地

旅人の出国地について分析の対象としたのは、①文化一〇～一二（一八三～一五）年の一二五件、②文政七～天保三（一八二四～三

二) 年の三二九件、③文久三(一八六三)年の一八件である。以上三時期の出国地数と件数の多い上位四件を表すとつぎのようになる。

①文化一〇～一二年、一六ヶ国、筑後三六件、肥前三四件、薩摩一五件、肥後一三件、②文政七～天保三年、三三ヶ国、肥前八八件、

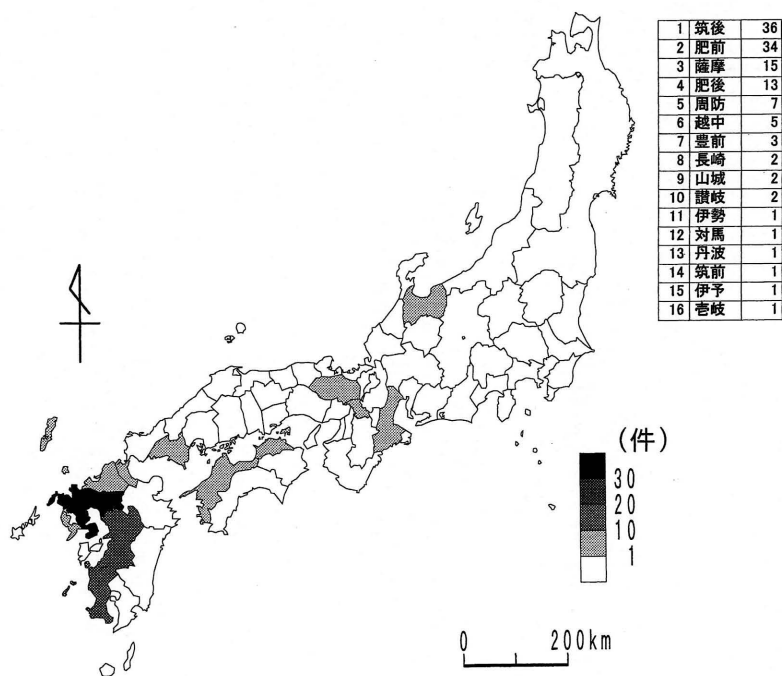


図2-① 高浜村への旅人出国地(文化10-12年)

筑後六三件、肥後五九件、薩摩二九件、③文久三年、九ヶ国、肥前五件、肥後五件、薩摩二件である。

図2は旅人の出国地を三時期別に地図化したものである。この図をみていくと、各年代によって出国地数に変化があるが、全国のは

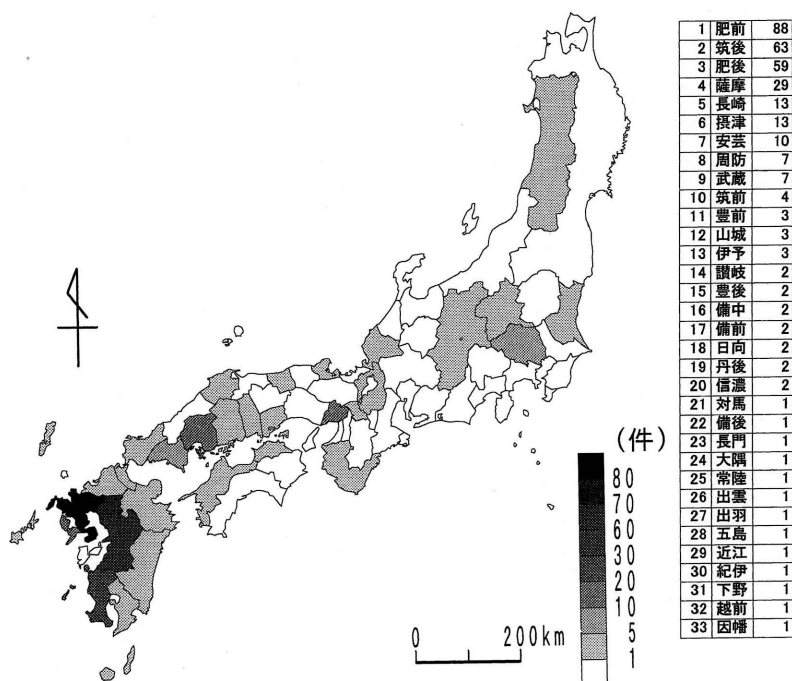


図2-② 高浜村への旅人出国地(文政7-天保3年)

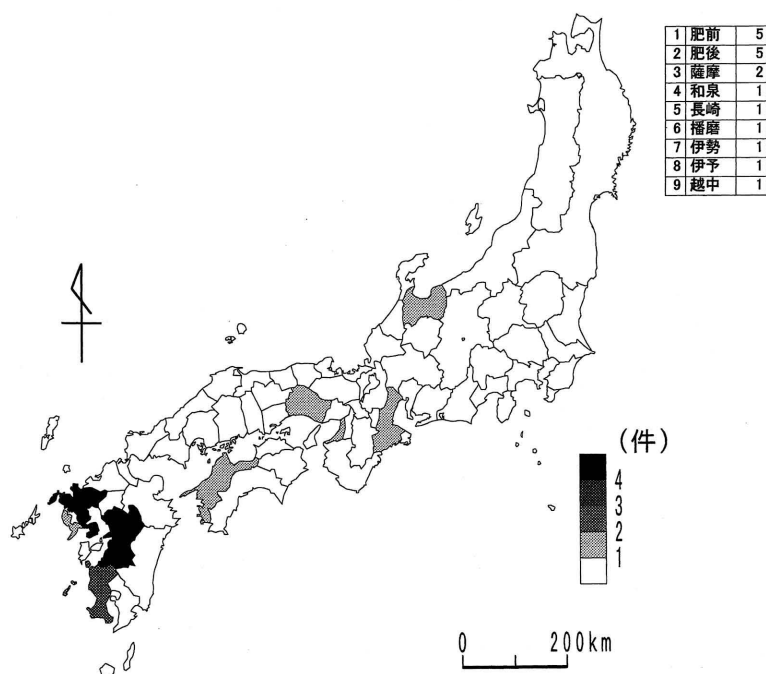


図2-③ 高浜村への旅人出国地（文久3年）

ば過半数を占める三三ヶ国から旅人が訪れている。この数値は旅人として多くの人々が日本国内を移動していたことをあらわしている。また出国地は天草周辺の筑後、肥前、肥後、薩摩四ヶ国が、全体のほぼ七割を占めている。特に有明海をはさんだ対岸の筑後と肥前が

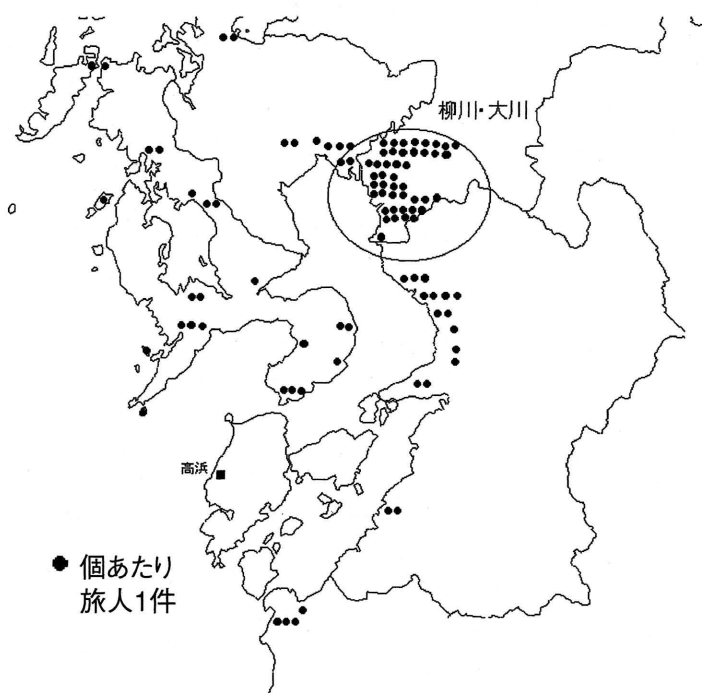


図3 天草周辺の旅人分布

多い。この点について文化一〇年から一二年にかけての天草周辺の旅人分布を示した図3で詳細に見ていきたい。一つの点は旅人一件をあらわしているが、有明海の北部、特に筑後の柳川・大川が圧倒的に多く、つぎに肥後の北部が多い。同じ国内でも三角半島で地域

的に連続している肥後南部が以外に少ない。これは高浜村が天草下島の西岸にあるという地理的要因が大きく、反対に天草下島の東岸や天草上島では対岸の肥後国南部の旅人が多いと思われる。距離が近い肥前を越えて、筑後柳川・大川地域の旅人件数は多数であるが、この点については売買物品の分析の際に後述したい。

旅人の到来と逗留

つぎに旅人の到来目的や村内での逗留場所、船揚地、逗留日数などをみていきたい。まず旅人の到来した目的であるが、これは旅人改帳に記されているそれぞれの肩書・身分を分類している。さきほどの三時期別の到来目的を分類するとつぎようになる。①文化一〇〇〇一二年、計一四三件、船頭一〇一、皿山稼八、売薬五、宗教勸化四、奉公三、庭師・船大工各二、諸職人五（傘張・櫛細工・張物・塗師屋・細工）、用事・尋人・番所交代・船待各一、②文政七〇天保三年、計一五〇件、船頭八四、宿四〇（医師・尼僧・薬屋・家士）、鯖釣一〇、病氣養生（画師）・虚無僧各二、廻船問屋・親類用事・船方稼各一、③文久三年、計一八件、船頭六、商人・売薬各二、椀類商・入歯細工各一、宿三、社人・山伏・虚無僧各一である。すべての旅人の肩書や目的が記されていない場合もあるが、三時期に共通するのは船頭の割合が高いことであり、高浜村の主要交通路が海上交通であったことをあらわしている。この船頭は漁

業に従事する者ではなく、商売品を輸送する船の船頭である。そのほかに宗教者や、上田家の窯業に従事する皿山稼等の特徴がある。しかし富山の売薬業をはじめ、庭師・傘張・櫛細工・張物・塗師屋・椀類商・入歯細工など、高浜村で営業していない職種、いわゆる遍歴する商工者たちの存在が明らかである。

一八二〇年代に記される宿とは、二で説明した旅人を取り次ぐ問屋と宿である。旅人が入村するとその村の問屋へ入り、商売及び宿泊に利用される^②。そしてその問屋から旅人の詳細が庄屋へ報告される。高浜村の問屋・宿屋は①文化一〇〇〇一二年には全体一四三件中一〇九件に記され、仲右衛門五五件、友兵衛・友太郎五四件、②文政七〇天保三年には全体一五〇件中一三七件に記され、仲右衛門六一件、友兵衛・友太郎三六件、宿屋俊吉四〇件となり三軒の名前が判明する。

①文化一〇〇一二年は仲右衛門と友兵衛・友太郎親子の問屋がほぼ半数ずつ、②文政七〇天保三年になるとこの二人のほか宿屋俊吉が登場する。この三軒の問屋・宿屋の詳細は不明であるが、文化一一年七月の出火後に作成され当時の高浜村の家割り^③が判明する図4の絵図をみると、湊から庄屋所への主要道と思われる付近に名前が集中する^④。

船揚地の特徴としてまず、②文政七〇九年の間に、船移動の旅人に比べて、徒歩移動の旅人が増加している点を指摘できる。この三

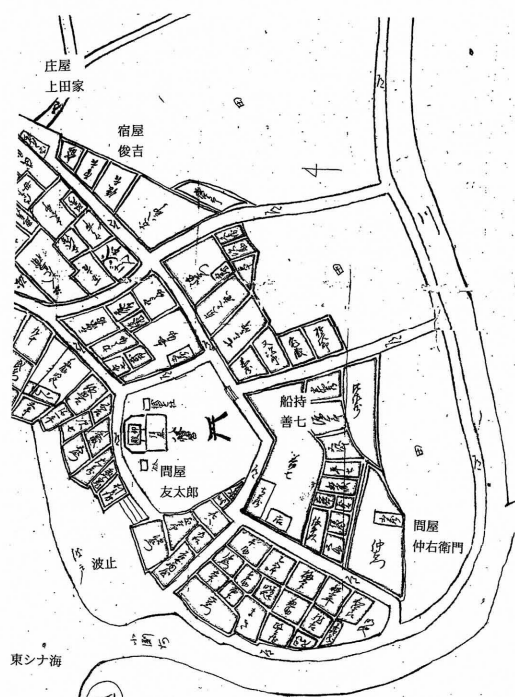


図4 問屋・宿屋の位置「文化11年7月晦日焼失絵図」

年間の全旅人一五〇件中五二件が徒歩旅人である。そして徒歩旅人の船揚げ地、いわゆる上陸地を示したのが図5である。図をみると、富岡二七件、牛深一二件で全体の八割を占め、その他、有明海沿いの北部沿岸地域が多いことが分かる。これは天草への旅人の多くが、肥前、長崎方面の窓口で陣屋が置かれていた富岡、薩摩方面の窓口で天草有数の漁港であった牛深、この南北の二つの入り口から入り込んだことを示している。この旅人が高浜村に逗留した日数は、文化一〇〜一二年の船頭九七件の例を確認できる。逗留日数は一〜九日が七五件とほとんどが短期間の逗留であったが、なかには七〇

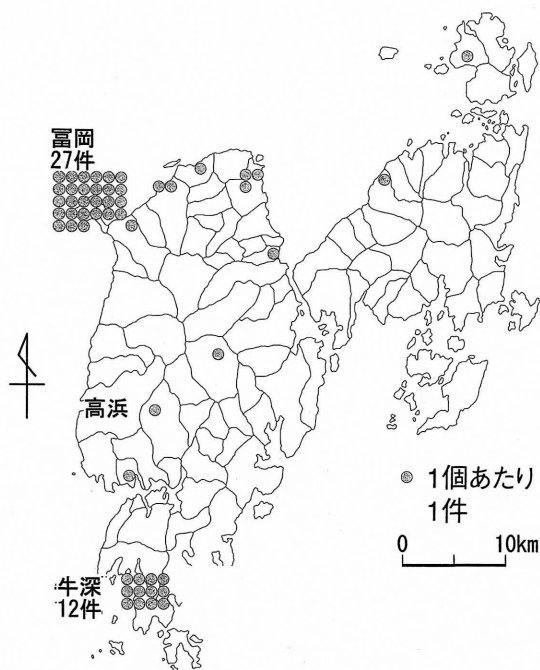


図5 高浜旅人の船揚げ地別の件数（文政7～9年「旅人改方帳」徒歩旅人52件中）

〜九〇日の長期逗留の例もある。文政二年「旅人改帳」では、大江組八ヶ村の旅人が記されている。大江組全体で六五件の旅人が確認できるが、その内高浜村は三四件で全体の過半数を占め、二位の崎津村一四件と比較しても圧倒的に多い。大江組は天草下島の西海岸を占めており、このことから高浜村は富岡・牛深につぐ西海岸の主要な港であり、また人と物の移動の拠点であったことがうかがえる。

表1 文化10-12、文政7-天保3年代の高浜村における売買品目一覧

年代	売買形態	名称と件数	分類
文化10～12年	販売	米25 大豆13 酒12 大麦3 小豆3 小麦2 塩3 素麺3 柿2	食用品
		油19 椎皮4 煙草4 網4 藍3 鍋釜2 芋1 竹1 櫓羽1 七島表1 石見鉄1 水瓶1 繰綿1	生活用品
	購入	苔5 砥石皿土5 堅炭3	林産物・特産品
		塩鯖8 万引鯖8 鯛6 万引鯛6 干鰯5 鰯4 鯉節4 鮪2 鰯1	海産物
文政7～天保3年	販売	米18 大豆6 小豆2 柿2 小麦1 素麺1 蒟蒻5 切芋1	食用品
		油17 網7 竹5 酒4 芋4 煙草3 櫓羽2 椎皮1 藍1 鉄1 小石1 膳台1 柿1 反物1 琉球椀1	生活用品
		干鰯3 鯉節3 魚類2 海老1 鰯1 千万引1	海産物
	購入		

商売される物

旅人の過半数を占める船頭は、二反帆の小規模な船で多くの商品を売買した。ここでは①文化一〇～一二年の一〇一件、②文政七～天保三年の八四件、計一八五件の商品売買の例から、その傾向を分析したい。

まず①文化一〇～一二年の一〇一件のうち、高浜村への販売は七八件で全体の八割、高浜村からの購入は三八件、売買両方の場合が一五件、販売は購入の倍近くとなる。売買それぞれの品物と件数をまとめたものが表1である。高浜村へ販売したものは、米・油や大豆など主要穀物や生活用品、鉄など天草で生産されない産物が多数を占める。また高浜村より購入したものは、苔や炭などの林産物、鯖や鯛など水産物、そして特産品である砥石である。

この傾向は文政七～九年にはつぎのように変化する。全体で八四件のうち、高浜村への販売は七一件、高浜村からの購入は一一一件、売買両方の場合が二件となる。高浜村への販売割合が九割を超え、輸入超過となっている。売買それぞれの品物と件数をまとめたものが先ほどの表1である。高浜村へ販売したものは、①文化一〇～一二年と同じく、米・油や大豆など主要穀物や生活用品が多数を占める。網や櫓羽など漁業に関する品物が増加している。また高浜村から購入したものは、林産物や砥石が消え、干鰯や海老など水産物のみとなる。高浜村は生活に必要な食料・物資を輸入し、山海の産物を輸出するシステムを確立していた。

この二つの時期に共通する特徴として、旅人の出船地と売買品の関係を指摘できる。特に筑後の柳川・大川地域の船頭は、全体の三割を占め、商品も米・油・酒などに限定され、主要穀物と生活用品を定期的に輸送していた。①文化一〇～一二年の柳川船は二三件すべて米・油を販売する船である。それは高浜村における米販売二五件中の一四件、油販売一九件中の一三件と多数を占めている。②文政七～天保三年に入っても同様の傾向であり、全体の三割二七件が柳川船であり、米販売は一八件中一二件、油販売は一七件中一四件である。

また薩摩や肥後の特定地域からは特産品が輸入され、高浜村は特産地との定期的な流通も形成していたことがわかる。薩摩船は、阿

久根の椎皮、日置・亀川の網、西方の櫓羽と船関係の加工品が多い。また肥後船は、佐敷の苧、芦北のつなぎ竹、高瀬の小豆・大豆などの農・林産物が多数を占める。

このような流通が形成される背景には、天草が海に囲まれ、海まで山が迫る平野の少ない地理的な要因や、人口が爆発的に増加する要因などを指摘できる。この天草の流通の状況を端的に示した一文が、万延元（一八六〇）年五月二六日に富岡役所の触に記されている。^②この年天草周辺諸国が津留をしており、「例年天草へ持渡来候穀物聊茂積越不申、海魚又者炭薪等当郡ヨリ商ニ売送。右代ニ纔之穀物買入方茂出来不申」とある。この一文から周辺諸国から天草へは主要穀物・生活用品を輸入し、その購入代金として天草から魚や薪等を輸出していることを読みとることができる。このことから、これまで分析してきた旅人の動向からみた高浜村の流通状況は、天草全体に共通する特徴であったといえる。^③

五 往来人の実態

往来の目的

これまで高浜村へ到来した旅人の分析を行ってきた。ここではもう一つの人の移動である高浜村から出た村人、いわゆる往来人の実態についてみていきたい。分析対象の年代は、旅人とはほぼ同時期であるが、①寛政九（一七九七）年、②文化一〇（一八三二）年、

③文政七（一八二四）年、④嘉永四（一八三二）年、一八世紀末から一九世紀後半までの四時期約六〇年間の傾向を追うことができる。^④

まず往来の目的であるが、件数が多い順に配列するとつぎのようになる。①寛政九年、五五件、願成就金比羅四、病氣養生四、立願温泉一、漁一、②文化一〇（一八三二）年、一七四件、奉公稼一四、病氣養生一一、西国巡礼七、用事一五、四国巡礼三、商売三、漁稼二、皿山稼一、神社参拝一、③文政七年、五三件、病氣養生六、用事六、漁四、立願四国三、稼二、商売一、④嘉永四（一八三二）年、一〇九件、漁四七、商売四一、用事九、諸稼七、病氣養生三、心願身延二、金比羅二である。

幕末の④以外は往来の目的を記すものは非常に少ない。全体的にみて往来の目的は奉公・稼、漁や商売などの生業に関わるもの、金比羅や四国巡礼など寺社参詣、病氣養生などに分類できる。幕末の一〇九件の往来はほとんど商売と漁が目的である。このことから推定して、他の時期の目的も記載のないものも商売か漁と思われる。

これらの往来人、特に目的が商売であった人々の具体的な行動が判明するのが、船の難破資料である。上田家文書中にいくつかの資料が残されているが、詳細に分かるのが天保二（一八四一）年二月五反帆幸丸の例である。^⑤船頭林助と水主正五郎の二人は一二月一八日、炭三一二俵を積んで高浜を出航した。一二月二一日長崎へ

表2 1790～1850年代の高浜村往来人の目的地一覧

年代	件数	年数	目的地
寛政9年	55	1	肥前19 肥後7 瀬戸内6 五島5 讃岐4 筑前3 平戸3 長門2 長崎2 備後1 大坂1 島原1 薩摩1
文化10～13年	174	3	肥後27 肥前26 近国23 薩摩18 長崎15 五島12 瀬戸内12 島原9 西国8 大坂8 筑後5 四国3 筑前2 平戸2 甕島2 豊前1 讃岐1
文政7年	53	1	近国11 薩摩9 島原8 甕島8 瀬戸内6 筑後3 五島3 四国3 肥前1 大坂1
嘉永4～7、安政4～万延2年	109	8	甕島39 坊津33 五島13 長崎6 大坂5 四国3 五島3 瀬戸内2 筑後2 肥前1 備後1 西国1

あげることができる。³⁹⁾この高浜村の往来人は、近隣の主要都市長崎で大量に消費される薪炭類などの林産物を販売し、長崎では米や畳など穀物や生活用品を購入している。このパターンは高浜を訪れる旅人船頭と同様であり、天草全体の流通状況を反映している。

着き、江戸町油屋藤平次を問屋に頼み一〇〇俵あたり二五貫文、計七八貫で売却した。その代金で米八俵、畳表一二枚、七島表二丸を購入した。二六日朝、長崎表出航後、立石沖にて破船している。また安永六（一七七七）年九月の八反帆船の船頭国松の場合も長崎へ堅炭三七〇俵を積んで出航している³⁸⁾。その他にも天保一四（一八四三）年九月に八反帆船の船頭福次郎が大東三六〇俵を積み、亥年四月に六反帆の船頭喜三郎が荻小束八〇〇束を積み込んでいる例を

往来の目的地と廻船

つぎに往来人の目的地を分析する。同時期の資料から目的地が分かるものを抽出し、まとめたものが表2、それを地図上にあらわしたのが図6―①～④である。基本的には旧国別に分類しているが、特徴的な地域、肥前の長崎・五島・平戸・島原、薩摩の甕島・坊津、大坂は別扱いとしている。また瀬戸内、四国、西国、近国など特定の国を指していない場合もそのまま記載した。

この表・図から目的地の時代的変遷をみていくといくつかの特徴があらわれる。①寛政九年には、天草より北の地域、肥前・筑前・肥後と瀬戸内への往来人が多い。②文化一〇～一三年に入ると、依然肥前・肥後が多いが、南の薩摩・甕島への往来人が登場する。③文政七年には近国が多く目的地ははっきりしない。そして④嘉永期以降は、薩摩、特に甕島や坊津、五島など天草の西・南の地域が多数を占める。特に④の甕島・坊津・五島は漁稼ぎの増加を反映しており、魚を求めて近隣の島へ往来していた。

もう一つの特徴は瀬戸内、大坂、四国など瀬戸内海沿岸地域へ全期間を通じて定期的に往来している点である。この往来は特定の村人の持船に限定することができる。表3は持船と記された文化一〇～一三年の廻船一覧である。庄屋上田家の持船の件数が多く、二反帆の順宝丸が九件、五反帆の順幸丸が八件、計一七件である。どちらの船も船頭や人数、目的地が固定している。順宝丸は船頭利右衛

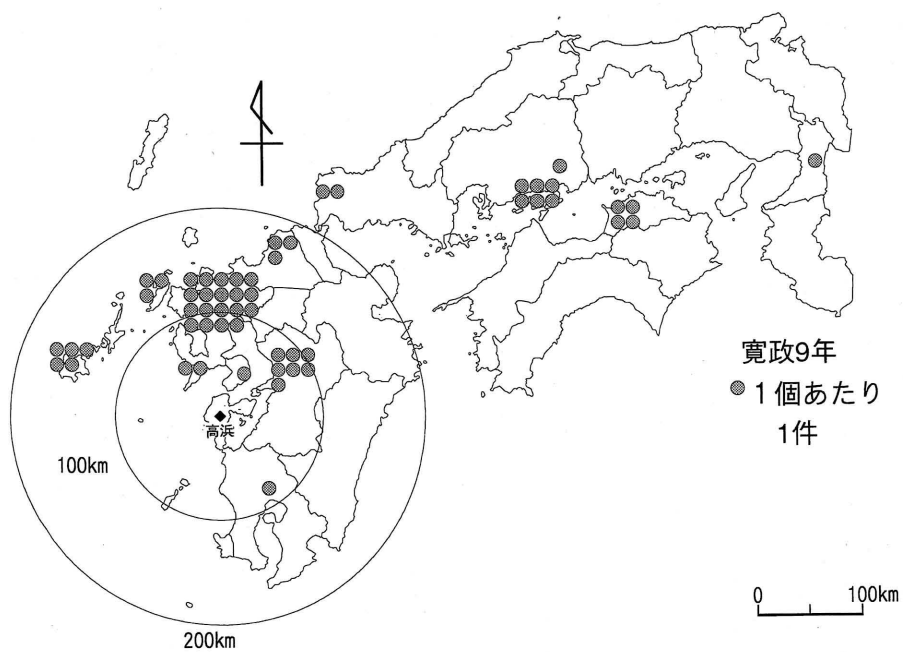


図 6-① 高浜村往来人の目的地

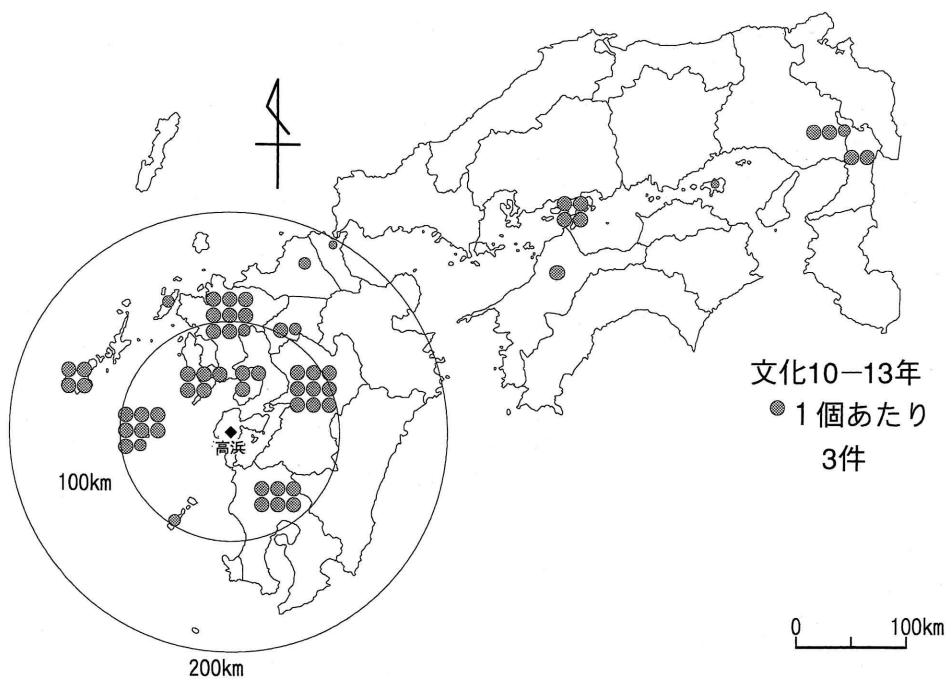


図 6-② 高浜村往来人の目的地

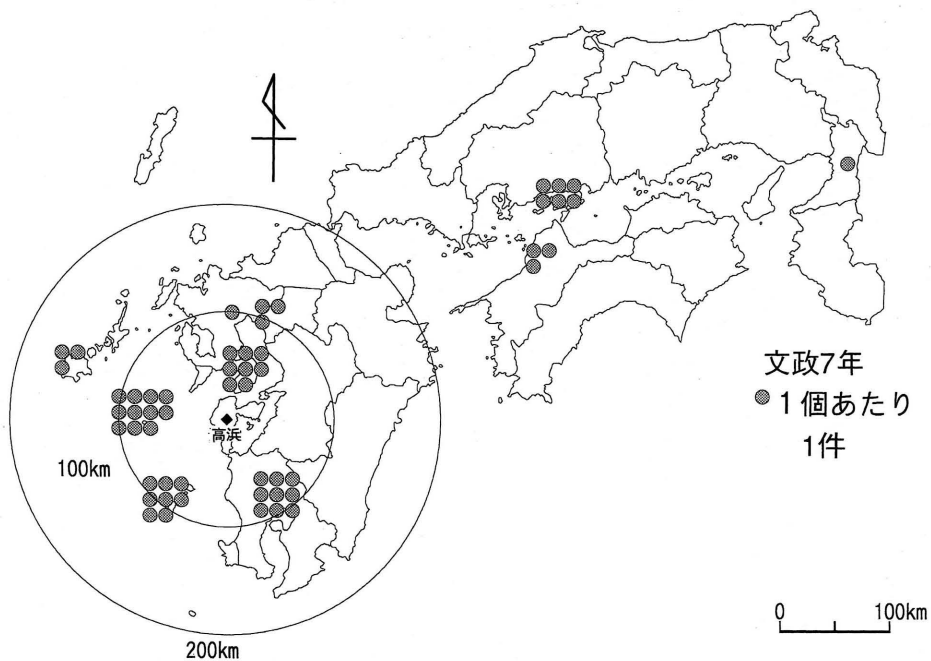


図 6-③ 高浜村往来人の目的地

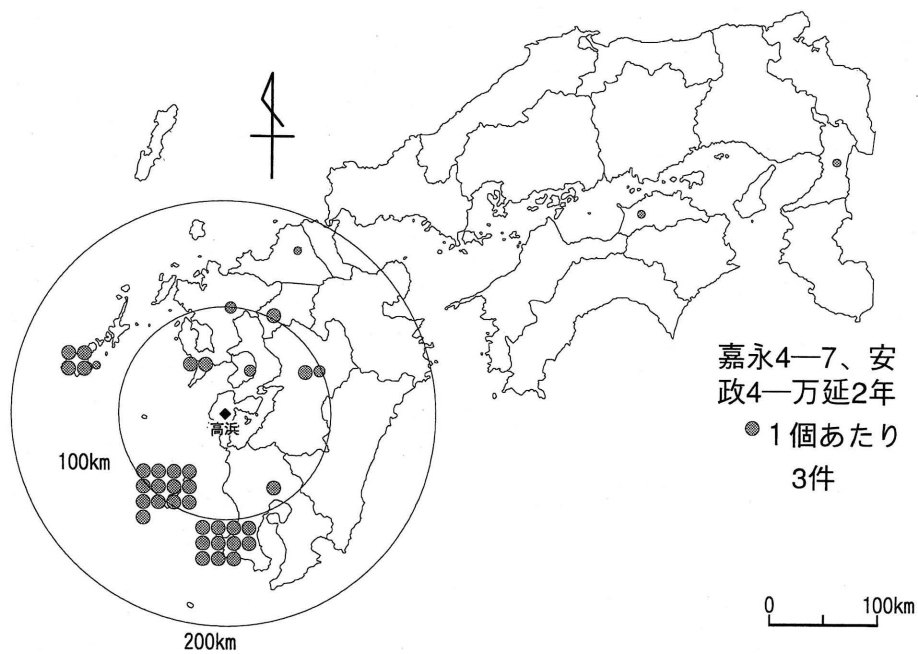


図 6-④ 高浜村往来人の目的地

表3 文化10～13年高浜村廻船一覧

順宝丸(上田家)

	年代	月日	反	沖船頭	人数	目的地
1	文化10年	2月 5日	2	浅五郎	2	肥前長崎
2	文化10年	9月14日	2	仁左衛門	2	長崎
3	文化10年	11月17日	2	朝五郎	2	瀬戸内
4	文化11年	1月18日	2	利右衛門	2	薩州
5	文化11年	1月18日	2	利右衛門	2	肥前
6	文化11年	2月10日	2	浅五郎	2	薩州
7	文化12年	5月14日	2	浅五郎	2	薩州
8	文化12年	6月23日	2	浅五郎	2	肥後小嶋
9	文化13年	1月26日	2	浅五郎	2	八代

順幸丸(上田家)

	年代	月日	反	沖船頭	人数	目的地
1	文化10年	2月 1日	5	兵吉	7	大坂
2	文化10年	7月 2日	5	惣左衛門	7	大坂
3	文化11年	2月19日	5	惣左衛門	7	大坂
4	文化11年	8月 3日	5	惣左衛門	7	瀬戸内
5	文化12年	2月16日	5	惣左衛門	7	大坂
6	文化12年	8月 1日	5	兵吉	7	大坂
7	文化13年	3月28日	5	兵吉	7	大坂
8	文化13年	8月21日	5	兵吉	7	瀬戸内

新左衛門船

	年代	月日	反	沖船頭	人数	目的地
1	文化10年	2月12日	2	元吉	3	肥前
2	文化10年	7月 6日	2	利吉	2	肥後
3	文化10年	6月23日	2	元吉	4	瀬戸内
4	文化10年	4月18日	2	元吉	3	肥前
5	文化10年	4月18日	2	民助	3	肥後
6	文化10年	7月28日	2	元吉	4	瀬戸内
7	文化10年	11月 6日	2	元吉	3	瀬戸内
8	文化11年	5月 9日	2	元吉	2	肥前

善七船

	年代	月日	反	沖船頭	人数	目的地
1	文化11年	2月 1日	2	房吉	3	瀬戸内

艀へ向けて出航した順幸丸の運航に関する詳細な記事がある。八月一九日順幸丸に荷物を積む予定であったが雨天で中止となる。二一日晴天となり、焼物・砥石・鯉節・にぶを順幸丸に積み、翌二二日の夜出帆した。出航後、四三日目の九月五日順幸丸は備後鞆から富岡へ帰帆し、翌六日順幸丸の水主安多・伊勢蔵がやってきて、綿六一本、鉄一七俵を積んで帰ってきたと報告を受ける。七日には順幸丸の荷を積むために順宝丸を富岡へ派遣した。以上のような運航であった。

積荷の焼物は、八月三日皿山の窯口

門・浅五郎で人数は三人、長崎・薩摩・肥後の近国へ出航している。対して順幸丸は船頭兵吉・物左衛門で人数は七人、大坂・瀬戸内など遠国へ出航している。このことから船の規模によって航海先が相違している点を指摘できるが、上田家の場合、大坂・瀬戸内方面へ行く順幸丸は焼物・陶器などを販売する定期廻船であったことがうかがえる。

『上田宜珍日記』には文化一三（一八一六）年八月、瀬戸内の備後

開が行われ焼き上がったもので、備後以外にも二七日に団平船で肥後八代、九月一九日に順宝丸で薩摩に向けて出荷されている。上田家で生産された焼物は宝暦一二（一七六二）年の窯開設以来、安永五（一七七六）年には長崎奉行より在留オランダ人向けの磁器製造を命じられ、翌年出島店売御免となり、オランダ東インド会社を通じて陶磁器を輸出するまでに成長した。

その他、鯉節は八月一四日に崎津より三六〇連を積み出し、また

「にぶ」は榎・椿・松の木であるが、一八、一九日小田床村より二艘の船で積み出している。そして輶より積み帰った品物は、備後の北部、中国山地で生産された鉄であった。先にみた旅人の積荷にも石見鉄があり、中国山地の鉄が天草へ輸入されていたことがうかがえる。

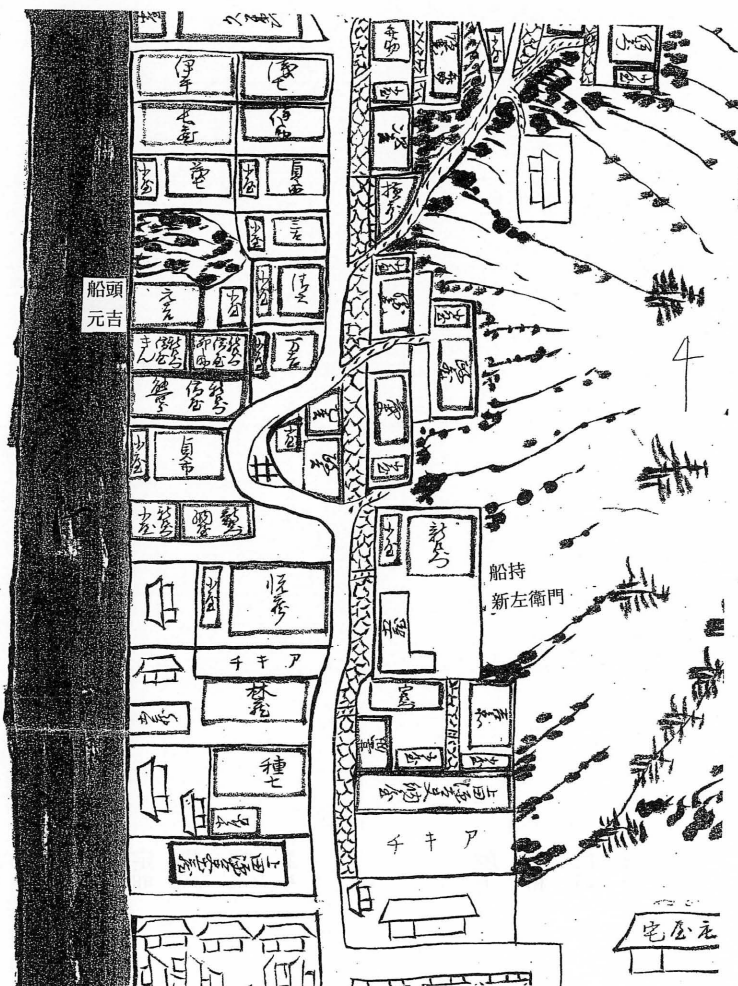


図7 廻船主の屋敷「文化12年12月焼失絵図」

『上田宜珍日記』にはその他の上田家の廻船と積荷の状況について記されている。文化一一（一八一四）年八月三日備後輶行きの順幸丸は綿、文化一二二年三月五日大坂行きの順幸丸は榎実、同年八月三日大坂行きの順幸丸は綿・鉄、同年十一月三日瀬戸内行きの順宝丸は焼物・干鰯、をそれぞれ積んで出航している。干鰯や榎実など積

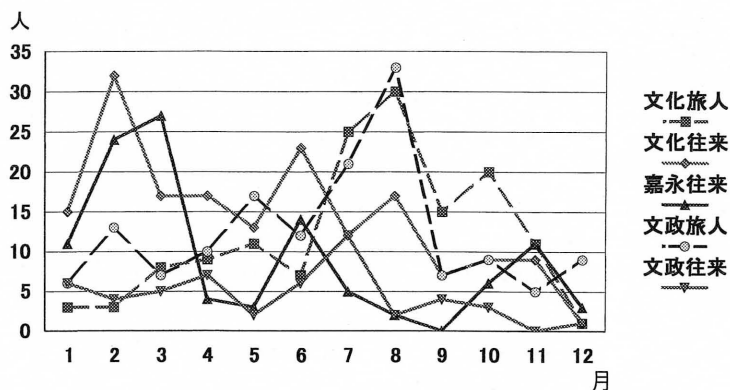


図8 旅人と往来人の月別変遷

荷の多くは山海産物であったが、鉄など他国産品も積荷としており、高浜や富岡港で購入した品物を転売する買積船として運航していたと思われる^④。上田家の船は高浜や近隣で生産された山海の生産物を瀬戸内付近へと出荷し、天草で生産不可能な産物を輸入していた。

またこの順幸丸は九月一七日に「御廻米積初」とあるように、幕府領長崎・天草の御廻米船としても運航していた。

上田家以外にも新左衛門の二反帆船が八回、肥前・肥後・瀬戸内方面、善七の二反帆船が瀬戸内方面へ出航している。この新左衛門・善七については詳細な資料はないが、絵図資料から土蔵を持つ広大な屋敷を所有する商人的性格の人物であると推定できる。図7の文化一二年一二月の絵図には新左衛門の屋敷地と土蔵、小屋が記されている^④。図4の文化一一年七月の絵図には善七の屋敷地と土蔵、店が記されており、周辺の敷地に比べて広大である^⑤。高浜村には上田家をはじめ商人的性格をもつ村人がおり、高浜と近隣の経済流通を支えていた。

旅人と往来人の到来月

最後に旅人の到来と往来人の出国時期の検討をしたい。文化、文政の旅人と往来人および嘉永の往来人を月別で比較したのが図8である。そこから旅人は七、八月がピークとなり、往来人は二、三月がピークとなることがわかる。旅人と往来人ではピークとなる時期

が違ふことがわかる。往来人の二、三月は農閑期であることが一つの要因ではないかと推定できる。また安政期には、六八件中四月が六〇件と全体の九割を占めており、往来人は提出時期をまとめている可能性がある。

以上、往来人の実態について分析したがいくつかの特徴をあげることができる。①目的は商売・漁・寺社参詣・病氣養生・奉公など様々である、②天草周辺四ヶ国への商売・漁が大部分を占める、③高浜で生産される陶石・焼物を販売するために大坂・瀬戸内方面へ定期的に廻船を運航している点である。目的地は一九世紀前期は天草の北の肥前・筑後・肥後が多数を占めるが、徐々に天草の南の薩摩が増加し、幕末には薩摩近海の甑島・坊津が大部分を占めていくようになる。

六 政治的背景

これまでみてきた高浜村の人・物の移動の変遷の背景として、庄屋上田家の行動を『上田宜珍伝』から作成した表4の年表をもとに分析したい^⑥。一八〇〇年の前後三〇年間庄屋を務めたのが上田家七代目宜珍である。宜珍は任期中の三〇年間で高浜村を天草西海岸地域をカバーする大江組随一の政治・経済力を持つ村に転換した。その形成過程を、①上田家の政治行動、②高浜村の基盤整備、③主要港崎津の地位低下の三点から示したい。

表4 上田宜珍と高浜村関係年表

年代	西暦	事 項
宝暦12年	1762	父伝五右衛門が陶山開始
寛政元年	1789	高浜村庄屋に就任
寛政8年	1796	相続御仕方加役に就任
享和元年	1801	今富村庄屋後見 崎津村の疱瘡流行
享和2年	1802	弟演五右衛門が今富村庄屋へ、「天草風土考」執筆
享和3年	1803	舸子役5人を高浜村へ引受
文化2年	1805	崎津村へ納入していた漁業運上銀を直接富岡役所へ納入、キリシタン天草崩れ調査に従事
文化3年	1806	高浜川の測量
文化4年	1807	大庄屋格となる 高浜村の疱瘡被害軽微、全人口3370人中200人（6%）が罹病し、73人（2%）死亡
文化7年	1810	伊能忠敬の測量に同行、高浜村全図の作成
文化11年	1814	大火後に区画整理、八幡宮の再建
文化13年	1816	本戸組山境争論を調停
文政元年	1818	大江組大庄屋後見役、高浜村庄屋を引退
文政4年	1821	崎津村庄屋後見役
文政6年	1823	「天草嶋鏡」執筆
天保5年	1834	崎津村疱瘡被害甚大、全人口1851人中507人（27%）が罹病し、338人（18%）死亡

内の争論を調停し、文政元年には大江組大庄屋の後見となり、上田家の地位を上昇させた。決定的な機会は文化二（一八〇五）年「天草崩れ」と呼ばれたキリシタン摘発に尽力したことで、大江組の中でもキリシタンの割合が少ない高浜村の地位を、他村に比べて相対的に上昇させた^⑧。

二番目は高浜村の基盤整備である。文化四年疱瘡が流行した際に

まず最初
は上田家の
政治行動で
ある。享和
二（一八〇
二）年隣村
今富村の庄
屋に宜珍の
弟が任命さ
れ、文化四
（一八〇七
）年大庄屋
格を得、文
化一三（一
八一六）年
郡

隔離病舎の設置、医者の派遣など科学的な手法に基づき罹病者二〇〇人中の死者を全体の二％の七三人に抑えた。そのため他地域に比べ順調に人口が増加した。増加した人口に対しては、父の代から進めた陶石採集・焼物業を振興し村人に就労場所を提供した。また漁業に関しては、享和三（一八〇三）年舸子役五人を高浜村へ引き受け、文化二年からは崎津村へ納入していた漁業運上銀を直接役所へ納入し、漁業権を獲得した。先にみたように幕末にかけて薩摩地域の漁が増加するのは、この権利獲得の成果であると思われる。そして文化三（一八〇六）年に高浜川の測量、文化一一（一八一四）年の大火後には都市的な区画整理を行い、港湾及び商業地区を整備し、出入りの旅船数を増加させ、物資の輸出入を活発化した。

三番目は主要港崎津の地位低下である。東シナ海に面した西海岸の主要港であった崎津は近世前期から強力な漁業・商業特権を維持する^⑨。しかし崎津はこの時期、二度の疱瘡流行、天草崩れによる隠れキリシタンの膨大な摘発、相互扶助関係にあった隣接する山村今富村との確執など、いずれも高浜村に有利に働き、政治的・経済的地位が低下する。それが決定的となる天保五（一八三四）年の疱瘡流行では、罹病者五〇七人中死者が全体の一八％である三三八人にも^⑩のぼり、高浜村と反対に人口減少の一途をたどる。文化五年二四六六人であったのが、天保五年に一八六五人（七五％）、慶応四（一八六八）年には一二四一人と半減している^⑪。崎津は船宿・小売・仲

買商人が主で輸入品を郡内へ流通させる経済基盤しか持たず、高浜村のように多くの船持層が存在し、輸出できる産物を持たなかったことが経済的地位の低下を招いたと思われる。

高浜村は一九世紀初頭から、政治的地位の向上に加えて、村の基盤整備、海山を利用した産業の育成、海を流通拠点とした経済活動の活発化を成功させ、天草の政治経済の中心地富岡・牛深に続く、天草西海岸随一の地域として発展したのである。

おわりに

以上、六章にわたり、肥後国天草における一九世紀の人と物の移動について、旅人改帳・往来請負帳から分析を行った。重複する点もあるが以下四点にまとめた。

①旅人改制度は、文化一〇（一八一三）年の長崎代官の支配替を契機に強化された。理由として、石高に比して過多の人口からくる経済状態の悪化、長崎に近く異国船に接触する機会が多い、悪党の侵入防止などの村の治安維持の理由があげられる。

②高浜村への旅人は年平均四五件と多数到来し、特に天草周辺の四ヶ国（肥前・筑後・肥後・薩摩）を中心に、全国に分布していた。高浜村は天草西海岸で有数の港であり、問屋・宿も三軒確認できる。そして柳川・大川船によって米・油など穀物や生活用品を輸入し、山海産物、砥石・焼物などの特産品を輸出していた。

③高浜村からの往来人は、商売・漁を中心に病氣養生・巡礼・奉公など頻繁に村を出ていた。往来先は天草の北に位置する肥前・筑前などから、南・西に位置する薩摩・五島へと変化していく。これは漁稼ぎの増加など産業構造の変化に伴ったものと思われる。また庄屋上田家をはじめ商人的性格を持つ家による廻船の定期運航が行われ、特産品の焼物を瀬戸内、大坂まで販売していた。

④高浜村の活発な人の移動、経済活動の基盤には、上田家の政治的地位の上昇、大量死を招く流行病への科学的対処、港などの高浜村の社会資本の整備、そして崎津村の地位の低下などをあげることができる。

この高浜村の例から天草は、山海を産業・流通の拠点とする経済構造を維持していた。それは船によって他地域とつながり、農産物を輸入に依存し、山海産物を輸出するシステムであった。これに高浜村では庄屋上田家が陶石や焼物産業を育成したことが、他村と異なるプラス要因となり、大量の人・物の移動を維持できる環境が整備されたといえる。

本稿では、分析の進む高浜村の宗門改帳のデータ、また旅人改帳、往来請負帳をすべて対象とすることができなかった。⁽³³⁾また渡辺尚志氏らの天草地域、大庄屋研究も十分に取入れることができなかった。今後はこれらの研究を再検討し、天草全体の人の移動、物の流通構造について分析したい。

付記 この研究は平成七～一一年度文部省科学研究費創成的基礎研究「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」(研究代表者…国際日本文化研究センター名誉教授速水融)、平成二二～一四年国際日本文化研究センター共同研究会「徳川日本の家族と社会」において研究報告したものである。

注

- (1) この見解に関しては別稿を予定している。横田冬彦氏は日本型「戸籍」制度として宗門改を捉えられており、全国的に全ての人を対象にした点など同様の指摘をしているが、なぜ近世を通じて継続したかという問いについては考察していない。『日本の歴史』一六、講談社、二〇〇二年、一一六～一一七頁。
- (2) 柚木学「海運史料としての入船帳と客船帳―廻船の船跡と商品流通」、『日本水上交通史論集』六、文献出版、一九九六年。
- (3) 荻真一郎他『高知県の歴史』山川出版社、二〇〇一年、二六一～二六二頁。
- (4) 渡辺尚志「文化と天保期の大庄屋と地域社会」、渡辺尚志編『近世地域社会論―幕領天草の大庄屋・地役人と百姓相続―』岩田書院、一九九九年、一三八～一四〇頁。
- (5) 楠本美智子「近世中期の天草石本家の経営」、『九州文化史研究

所紀要』四五、二〇〇一年、六六～九八頁。

- (6) 柚木学「近世海運史の研究」法政大学出版局、一九七九年、上村雅洋「近世日本海運史の研究」吉川弘文館、一九九四年。

- (7) 檜垣元吉「近世天草の人口問題」、『九州文化史研究所紀要』二、一九五一年、一～一八頁。

- (8) 上田陶石有限会社所蔵上田家文書七七八。なお文書目録は天草町教育委員会編『天草町上田家文書目録』、一九九六年として刊行されている。以下「上田家文書」とする。

- (9) 上田家文書として、宮本又次「天領天草の商業と問屋」(『九州文化史研究所紀要』二、七〇～九五頁)に紹介されているが、現文書番号は不明である。

- (10) 『天草町上田家文書目録』、八頁。

- (11) 上田家文書二一三～五、七、九、一一―追一七～二七。

- (12) 上田家文書二一～二一。

- (13) 上田家文書二一六―一〇、一一―追一～一六、追二八。

- (14) 上田家文書二一～一〇。

- (15) 『苓北町史』史料編、一九八五年、三五六頁。

- (16) 本渡市教育委員会『天領天草大庄屋木山家文書御用触写帳』一、一九九五年、以下『御用触』と略す。なお『御用触』は二〇〇三年現在六巻まで刊行されている。

- (17) 『御用触』二、一一一頁。

- (18) 『御用触』二、三七一～三七二頁。

- (19) 『御用触』二、三二一～三二三頁。

- (20) 『御用触』二、三二四～三二五頁。
- (21) 『御用触』六、九五～九六頁。
- (22) 『御用触』二、四三九頁。
- (23) 『御用触』三、二〇五～二〇六頁。
- (24) 『御用触』二、三三二頁。
- (25) 『御用触』三、二二頁。
- (26) 『御用触』三、二二八～二二九頁。
- (27) 『御用触』六、四二七頁。
- (28) 『御用触』三、二二六頁。
- (29) 『御用触』三、二五四～二五六頁。
- (30) 上田家文書一一三、七、追二二。
- (31) 天草の船宿に関する研究はつぎの二点をあげることができる。
宮本又次「天領天草の商業と問屋」、舟橋明宏「天草郡地役人の存在形態と問屋・船宿」、渡辺尚志編『近世地域社会論―幕領天草の大庄屋・地役人と百姓相続―』、三八八～三九二頁。
- (32) 上田家文書五―三五四―二六。
- (33) 上田家文書一一―追二六。
- (34) 『御用触』六、一九五～一九六頁。
- (35) 平野哲也氏も寛政元（一七八九）年の資料から天草の産業は耕地に依存せず、山野河海の資源を活用し様々な生業を生み出し、現金収入を得る稼ぎ口としていたと述べている。「寛政八年百姓相続方仕法と村社会」『近世地域社会論―幕領天草の大庄屋・地役人と百姓相続―』、二五六～二五七頁。
- (36) 上田家文書一一―六―一一、追一、一〇～一三、一五。
- (37) 上田家文書五―一七九。
- (38) 上田家文書五―一八〇―一。
- (39) 上田家文書五―一八〇―六、九。
- (40) 『上田宜珍日記 文化十三年』天草町、一九九二年、一八九頁他。
- (41) 当時の順幸丸の船形模型が現在も高浜八幡宮に奉納されている。順幸丸は明治大正期も和船の形での写真が残され、現在もその名前が受け継がれている（『上田宜珍日記 文化五年』天草町、一九九九年、口絵写真）。
- (42) 『角川日本陶磁大辞典』角川書店、二〇〇二年、八四一頁。
- (43) 『上田宜珍日記 文化十一年』天草町、一九九一年、二三八頁。
- (44) 『上田宜珍日記 文化十二年』天草町、一九九二年、七五、二一七、二九八頁。
- (45) 渡辺信夫氏は近世の買積船と賃積船の体制についてまとめているが、全国的海運体系が賃積船を柱に成立したのに対して、地廻り海運と買積船の存在を軽視できないとして、各地に出入りする中小の買積船は地域における商品流通の担い手であったと述べている。高浜に出入りする船もこのような買積船であったと思われる。「近世の交通体系」『岩波講座日本通史』一一、岩波書店、一九九三年、一六五～一七一頁。
- (46) 上田家文書五―三五四―八。
- (47) 上田家文書五―三五四―二六。
- (48) 角田政治『上田宜珍伝…附上田家代々の略記』、一九四〇年。
- (49) 大橋幸泰『キリシタン民衆史の研究』東京堂出版、二〇〇一年。

(50) 平田正範『天草かくれキリシタン宗門心得違い始末』サンタ・マリア館、二〇〇一年、二二七～二三二頁。

(51) 森永種夫編『長崎代官記録集』中巻、犯科帳刊行会、一九六八年、一九三頁。

(52) 前掲注(50)。

(53) 高浜村の宗門改帳は、平成七～一一年度文部省科学研究費創成的基礎研究「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」(研究代表者・国際日本文化研究センター名誉教授速水融)旧西日本研究班で調査、研究が引き続き行われている。関連する研究としては、村山聡・東昇“*The lifecourse and households of hidden Japanese Christians in Amakusa islands*”と題してSSH A第二七回年次大会(二〇〇二年セントルイス)において研究報告を行った。